

業務展望レポート			
4	吉田 智	所属名	香川県教育センター
		職名	主任指導主事

### 〔1〕研修参加の意義

日頃各種メディアを通して「開発途上国」に関する情報を見たり聞いたりしているが、断片的なものや意図的に編集されたものである場合が多い。ネパールに行き、そこに住む人たちと直接接し、コミュニケーションをとることで、固有の文化や魅力に触れると同時に、この国の現状や途上国ゆえの問題点を見ることができた。JICAのプログラムはとても充実しており、ネパールを多角的に見させてくれたと思う。

途上国に対し、日本をはじめとする先進国は様々な支援を行なっている。その支援のあり方と効果、定着度などを見た時に、「本当に相手国のためになっているのか」と懐疑的に言われることがある。実際に支援の現場に行ってみて、支援の方法の多様さといかにその国・その地域にあった支援の方法をとるのかを考える難しさを感じた。何よりも国際支援の現場で働く日本人の、その真剣な働きに尊敬の念を持った。

一番見たかったのは、開発途上国の子どもたちの姿だった。ネパールの子供たちは人懐っこくて、家族愛に溢れ、好奇心旺盛、熱心に学び、元気に遊ぶ。決してすべての子どもたちが恵まれているわけではない。懸命に勉強をしても必ずしも報われるわけではない。でも、明るく活力溢れる姿に、自分も何か支援をしたいと素直に思った。

日本と異質なようで、共通点も見られる文化。日本人とよく似た顔をした人も見かける。同じアジアにあり、互いに国の名前は知っていても、具体的なことはよく分からない。そんな国の人たちとコミュニケーションをとり、相互理解のために情報を受けるだけでなく、発信する場も得たことは国際理解教育推進の上で、得がたい経験であったと思う。



### 〔2〕海外研修全般に関する所感

出発前、JICA四国榎島さんからこまめに送られてくるメールは、本番に向けて気分を高めてくれると同時に、準備を促してくれた。現地でも、同行してくれたJICA四国西岡さん、JICAネパール事務所西前さん、飯田さん、通訳のラグさんをはじめ多くの方々のおかげで、普通ではできない非常に濃厚な体験をさせていただき、充実した研修をすることができた。とても感謝している。

ネパールは、開発途上国の中でも最貧国の分類に入る。主要産業である農業の生産性は低く、経済は外国からの支援と海外出稼ぎ者からの仕送りに支えられ、首都カトマンズでも1日に何時間も停電する。一方で、車やバイクが道路に溢れ、多くの国民が携帯電話を持っている。開発途上国は「何もない」のではなく、先進的な面と開発途上の面が「バランスが悪く」混在しているのだと実感した。このことが、支援のあり方を難しくしているとも感じた。



支援については、JICAが日本のODAにより整備したカトマンズーバクタブル道路のように、大規模な開発援助が1つの形である。この道路は、日本の建設会社が日本式の規格で作られ、ネパール政府が管理・運用を行なっている。高規格ゆえに事故が多く、現地警察も運用の仕方に戸惑ったよう。今も、スピードが出過ぎないように、道路にコーンを置いてスムーズな流れをあえて妨げようとしていたりする。確かに使いきれしていない、何年か経って大規模補修が必要になってもネパール人の手ではできないのでは？という不安もある。しかし今、ネパールには必要なものである。大規模な、通行止めになりにくい経済の大動脈が、

それもできるだけ速やかに。そうすると、現地の人と一緒にと言わず、日本企業が作る方が間違いがなく、速いし良いものを作るのである。一方で、ネパールで活動するNGOのシャプラニールやラブリーンジャパンのような草の根の、現地の人と一緒にできる範囲のことを無理のない速度で進め、その地に定着することを優先するような支援の形も大切。支援のあり方というのは難しい。必要な支援をすればいいというだけではなく、相手国の意思を確かめながら、どのような形で支援するのが、長い目で見たときにその国のためになるのか考えながら行なわなければならない。支援の現場で働く人たちには頭が下がる思いになった。この人たちの常日頃の活動のおかげで、我々は研修中どこに行ってもネパールの人たちに歓迎され、優遇されたように思う。この優遇が当たり前になってはいけな心がかけた。これを日本人の「驕り」ととられると、国際支援の現場で尽力している人まで同じ目で見られ、ひいては日本へのマイナス評価につながるのではないか、などと考えた。外国に出たら、我々も含め一人一人が日本人の象徴であり、個人がしたこと「日本人が」になる。そのことを忘れてはいけなと思った。最後の振り返りで飯田さんの言葉「今回行った所

はまだまし。アクセスできるから。本当に大変な支援の現場はアクセスも難しい。」、西前さんの言葉「好奇心から始めると継続できる。同情から始めた支援は続かない。」は印象に残った。

登下校時、大きい子どもが小さな子どもの手を引いて歩いている姿を毎日見た。自分の遊びを我慢し、幼い弟や妹の遊び相手をする子どもたちを見た。この国の子どもたちは当たり前のように、家の手伝いをし、兄弟の世話をする。学校では英語をしっかりと身につけ、好奇心いっぱいに学んでいる。しかし、国内にそれを生かせる仕事がなく、海外へ出稼ぎに行き、肉体労働などに従事する。頑張ったことが報われないということは、最大の不公平だと思った。教育は大切であり、この国の近代化を図る上で最優先事項であることは疑いようがないが、今の子どもたちの学ぶことへのモチベーションの元は何なんだろうと考えてしまう。また、児童労働の問題がある。制服を着て登校する子どもたちの横を、働く子どもたちが通り過ぎる。かれらはどんな気持ちなのだろうと思った。

それぞれが、現地ゆえに感じる事ができた開発途上国の実情だったと思う。

**[3]特に印象に残った視察・訪問先を3つ挙げ、その内容をご記入ください。**

視察・訪問先	所感
<p>セキデヴィパンチカンニア小学校</p> 	<p>子どもは1年生から5年生まで約60名、先生は5名という学校。4年生の教室で教科書を見せてもらったが、英語で書かれていた。英語で書かれた算数の教科書、初めて見た。</p> <p>青年海外協力隊福山隊員の巡回指導の時に、ある男の子が妹らしき、小学校に入る前の小さな子どもを抱っこして一生懸命授業を見ていた。写真で確認すると、どうやら最初は座って抱っこしていたようだが、授業を見たくなくて立ち上がったらしい。その時に、妹を下に置くのではなく抱っこしたのだろう。そうまでして授業を見たいと思う好奇心と、妹を大事にする気持ちに感動。後で、同じように小学校に入る前の兄弟を連れた小学生たちを見た。みんな兄弟をかわいがっている。</p> <p>校長先生からこの学校について思うことがあれば言って欲しいと問われ、「この学校の子どもたちは、みんな好奇心を持って学ぼうとしている。あの意欲を大事に伸ばして欲しい。」と答えた。</p>
<p>ごみ最終処分場</p>  	<p>カトマンズ市内のごみは分別されずに出され、毎日収集車が市内を回って、すべてを市内の中間処分場に持ち込み、大型トラックに積み替え(積み替えだけ、分別なし)、26kmの山道を運ばれて、最終処分場に埋められる。最終処分場周囲の道端の草は、葉が埃で白くなっていた。また、谷底には川が流れていたが、その横に水が黒く濁った池(水溜りと言うには大きい)が。特に堤防もなく、多分ごみで汚染された池の水は、土の中を染み出し川に流れているのだろうと思える。来る途中、川の水で洗濯をする姿も見したが、聞くと、飲み水も川の水。人体への影響は?トラックからごみが降ろされると、多くの人が集まってくる。この人たちは勝手に集まってきて、捨てられたごみを分別して、使えるものを収集してカトマンズへ持ち帰り、最後はインドへ売っている。これでごみのリサイクルが完結するそう。資源ごみは、この最終処分場まで往復してカトマンズへ帰って海外へ。分別収集ができれば無駄なコスト削減になる。燃えるごみは近郊にごみ焼却場を作って焼けば、最終処分場に持ち込むごみは更に減り、効率化が図れるのと思った。分別回収に向けて、青年海外協力隊員を中心に住民への啓発活動を行っているという話を聞いた。</p> <p>ごみの上にテントがあり、その中から小さな子の泣き声が。しばらくすると、1歳か2歳くらいの子どもがテント入り口に。周りでは、兄弟と思える3歳から5歳くらいの2人が遊んでいた。臭いもきつく、汚染物(使用済みの注射針や薬品の瓶なども)がある中での生活。親は、ごみの分別中なのか、側にはいなかった。他にもごみの山で遊ぶ兄弟や、ごみを積んだトラックに乗った子どもなど、たくさんの子どもたちを見た。</p>



Patlekheth 村ホームステイ



泊まった家はタマンさん一家のお宅。コミュニケーションは基本英語でOK。互いに伝えたいことを(伝わらないことも多々あったけれども、その時は仕方ないので話題を変えて)次々と話していった。ここだけではなく、ネパール滞在中どこでも英語が通じた。この国の英語教育の様子がうかがえる。主に話し相手になってくれた次男は、頭もよさそうだし、英語力も確かだと思ったが、家の田畑を手伝っているとのこと。仕事がないらしい。

翌朝起きると、台所では母と長女が食事準備。次女はトイレ等の掃除、後から近くの沢で食器洗い。どうやら家族の水源地はこれらしい。次男もあれこれお手伝い。父は朝食前に帰ってきたが、聞けば朝から農園の仕事。家族揃って働き者。当たり前のように家族みんなで仕事を分担している。こうして物はなくても家族が助け合って生きる生活に、我々は懐かしさと豊かさを感じているのかもしれない。かつての日本にあって、今は失ったものがここにはある。

#### ※特に印象に残った視察・訪問先・事柄(裏バージョン)

- ・国際協力の現場では女性の活躍が目立っていた。どの人も活気に溢れ、信念を持って活動をしていた。
- ・カトマンズの交通事情。人が溢れるバス、3人乗り・4人乗りしたバイク、大きな通りを所かまわず渡る歩行者。それぞれが無秩序のようで、我々には分からないルールで動いているようだった。とにかく常にクラクションが聞こえていた。
- ・古都パタンやパシュパティナートなどの歴史・文化的に価値がある建造物。細かい彫刻群が素晴らしかった。
- ・日本との共通性を感じるところもあった。
- ・ヒマラヤの美しさ・神々しさ・峻厳さ。
- ・KIDOホテルの毎朝の和食と日本風の風呂で癒された。

#### [4]今後の業務における活用の可能性

現在、県教育センターで教職員研修の業務を行っている。ここで、国際理解教育の講座を担当し、現場の教職員に対し今回見て、聞いて、考えたことを伝えていきたい。特に、開発途上国の現状と支援の考え方、情報交換(受け入れ理解するだけではなく、発信も行なう)の在り方について、提起していきたい。

学校現場に復帰した後は、生徒に直接これらのことを伝えていきたい。帰国後、まず自分の子どもに伝えたことが2つある。①英語を学べば世界中のいろいろな人とつながることができる。②日本では頑張ったことは何らかの形で報われる。しかし、頑張っても報われない国もある。頑張れば報われるということは、幸せなことなんだと知って欲しい、という2点。このことも伝えていきたいと思う。

